イケメン病

ぬじゃわきし

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
イケメン病

【Ｎコード】
Ｎ１４５４Ｍ

【作者名】
ぬじゃわきし

【あらすじ】
突如発生した奇病イケメン病！感染するとイケメンになり、イケメンが頂点に達すると死ぬというおそろしい病気！
はたして感染した物田の運命はいかに！

ある日突然顔がイケメンになった。

とんでもない病気が蔓延した。原因は不明である。輸入か帰国か何かで病源を持ち帰ったとか、火山噴火から発生したのだとか、放射能で突然変異したからだとか色々諸説あるが、やはり真実は分からない。

その病気は感染すると、顔が徐々にイケメンになっていくと言う奇妙な症状があった。それだけならいいのだが、人々を恐怖に至らしめたのは次の症状であった。即ち、感染者のイケメンが頂点に達した時に、感染者は死ぬ。人々はそれに恐怖を覚えていた。

この病気は独特の感染の仕方をする。ＮＤＤＯ（Ｎｉｃｅ－ｇｕｙ Ｄｉｓｅａｓｅ Ｄｅｆｅｎｃｉｎｇ Ｏｆｆｉｃｅ…イケメン病防止機関）によれば、健常者が、感染した患者のその輝くイケメンを直視し過ぎると感染するそうだ。と言うのも、患者の顔からどうやらイケメン光線なるものが出るらしく、その光線の影響だと言う。これは症状が進行すると光線はより強くなるらしい。

物田康夫（もった・やすお）もその光線をうっかり長時間浴びてしまった。何故かと言うと、彼の取引先が実は感染していたからである。取引した後、どうも顔の内側が、圧迫するような奇妙な感触を感じていた。気のせいだろうとその夜帰宅した時に異変が起きた。突然顔中に締め付けられるような苦痛を感じた。いたいいたい、まるで矯正みたいだと苦しみ、やがてその苦痛が引いた時、何があったのだろうと彼は鏡を見た。

顔が少しイケメンになっていた。

元々彼は中途半端に不細工な男であった。そんな彼だが、今の顔はそれよりか整いつつある。

物田は悲鳴を上げた。だがその悲鳴も、キザっちいイケメンみたいな含みがほのかに感じられた。物田は恐怖を感じ、急いで帰宅した。

ドアの激しい音が聞こえた時、物田の妻が「どうしたの？」と尋ねたが、物田は少しイケメンになった顔を覆って、「見るな見るな見るな！！！」と叫びながらどたどた走って自分の部屋に引きこもった。

イケメンの生活

突如自分の部屋に引きこもった物田康夫に、妻、君子が呼びかけた。

「康ちゃん、どうしたの？入るわよ。」

そう言って君子はドアを開けた。鍵をかけ忘れた自分の不用心さに腹をたてながら、物田は布団で顔を隠した。

「どうしたの？顔を見せて。」

「いやだ。」

「あなた声も少し変だわよ。心配だわ。顔を見せて。」

そうやって布団を脱がそうとする妻を物田は頑なに拒んで叫んだ。

「だめだ！見ちゃだめだ！」

「見せなさい！」

「だめだ！だめだ！わ！」

布団が脱げた。布団の下には少しイケメンになった物田がいた。その顔は暗がりでもうっすら輝いているように見えた。

「あなた！」

妻が叫んだ時、物田は急いで布団で顔を隠しながらやや低音ボイスで言った。

「そうなんだ。感染した。」

「どうするの？病院に連絡する？」

「やめてくれ！隔離病棟だけは入りたくない…」

隔離病棟とは、特に症状の進行したイケメン病患者が閉じ込められる場所であった。通称「イケメンパラダイス」と呼ばれ、病棟の中には無数のイケメンが揃っていると言う悪夢の館である。

「…隔離病棟だけは…。とにかく僕は家にしばらくこもる。」

「そう…」

その日から物田は会社を病欠し始めた。家では常にそのイケメンを晒さないためにホワイトマスクを着けていた。だがイケメン病で精神も冒されつつある物田はこのホワイトマスクではどうも落ち着かなかった。どうせ着けるなら仮面舞踏会みたいな仮面がいいと考えた時、物田は思考もイケメンになりつつある自分自身にゾッとした。

いつも彼は、朝洗面所で歯を磨くときを怯えていた。洗面台に鏡があって、いつも毎朝鏡を見る度に、（こんなにイケメンになってしまったのか…）と恐怖を覚えた。事実彼の顔はどんどんカッコ良くなりつつある。今のところ症状の進行はゆるやかである。だが時に急激にイケメンが進行する事があり、それを彼は恐れていた。

徐々にイケメンになる彼に反して、世間は徐々に不細工な方向にいきつつあるのを彼はＴＶや窓の外の人々を見て感じた。ドラマやアニメやバラエティーやニュース…どれもこれも不細工であった。それも只の不細工ではない。いわゆる「ブサ可愛」といったイケメンを含んだものではなく、選りすぐりの最強の不細工で、容姿は勿論、態度や性格やユーモアセンスや技能等、何から何まで不細工なのを選んだのである。その結果、以前なら絶対テレビに出れない大々根役者や、とんでもない悪声で歌う歌手、キワモノ芸ばかりのお笑いが並びに並び、スタイリッシュな語法や話術もイケメンの一つに数えられたため、トークのテロップや大抵の歌の歌詞などは、思わず目を覆うような放送禁止用語が８割を占めるようになった。

当然、ファッション事情もがらりと変わった。バラエティーのお洒落コーナーでは「技あり！不細工化粧のテクニック」なんていう末期的なコーナーもあった。

窓の外を見れば、いかにイケメン差別が激しいかが分かる。小学生が集団で一人のクラスメートをいじめていた。指を指して何度も連呼していたのである。

「イ・ケ・メン！イ・ケ・メン！」

「イケメンじゃないもん！」

いじめられている小学生はそう叫ぶが連呼は続いた。

「イ・ケ・メン！イ・ケ・メン！」

「ちがう！イケメンじゃない、イケメンじゃないもん！」

「イ・ケ・メン！イ・ケ・メン！」

「イケメンじゃないもん、イ…ケメンじゃ…ない…もん…うっ・・・うっ・・・」

小学生はそのまま泣き崩れるが日が暮れるまでイケメンコールは続いた。

物田の妻も働いているのだが、彼女も職場のいじめを恐れてか、ファッション雑誌で流行っているという「不細工化粧」とやらをやっていた。まるで隈取りのような化粧をしている彼女を見て物田は、こんな化粧が職場に溢れているのかとゾッとした。

彼女の話によれば、イケメン病が流行って以来、もともとイケメンだった人は急いで不細工に演出するように服装や髪型、はては化粧まで変え始め、性格のいい、すなわち性格イケメンは身を削って根性悪になるようにがんばっているという。

物田はため息をついた。そのため息は思いもがけなく、深い明瞭のいい声だったので物田は途中でため息を止めてしまった。

そしてホワイトマスクを付け直した時、ドアホンが鳴った。

誰だろうと窓から覗くと、三人の友人が来た。お見舞いだ。

お見舞い

物田が扉を開くとやはり彼の親友の牧中、相田、最上がいた。彼らだけにはイケメン病の事を打ち明けていたのである。ホワイトマスクをつけたまま彼は迎えた。

「どうぞ。」

久々に自分の声を聞いた物田はまたギクリとした。前よりまたイケメンの声になっている。

友人達は物田宅のリビングに来た。物田はイケメンボイスで言った。

「くつろいでて。」

友人達はソファに座った。暫くして物田はお茶を運んで来た。以前だったら彼がしなかった事だ。病気の影響で身のこなしがイケメンになってしまったのだ。

そして物田は友人達とは向かい側のソファに座ったが、その際、足をギュンと華麗に振り回して柔らかに足を組んで軽く椅子に肘をつけながら座った。

その奇妙な座りかたに唖然としている友人を見て物田は言った。

「ああ、気にしないで。つい、やってしまうんだ。」

友人の相田が切り出した。

「なあ…お前、会社、行ってないんだろう？大丈夫なのか？」

「ワイフの君子が働いてる。」

「でも…パートだろ…お前貯金してたからいいけど貯金切れたらこれから大変だよ。」

「その時は僕も症状が末期になってＧｏ　ｔｏ　ヘヴンさ。」

友人らは物田の言葉の節々にイケメンの片鱗が現れているのを感じて、もうそんなにイケメンになってしまったのか、と哀れみを感じた。

友人の最上は言った。

「でも、その仮面つければ働けるじゃないか。」

「この仮面が万全かどうか分からない。なにしろＭｙ　ｅｙｅｓは出ているからな。だから、ワイフの君子に俺のイケメンの毒気にあてられないよう、常にｍｏｖｅしている。」
「でも…」
「それに、どのみち働けたとして俺はイケメンパラダイスに行く事になる。それだけは絶対にｄｅｎｉａｌ。」
「そうか…」
そして今度は牧中が切り出した。
「ねえ…症状はどれだけ進んでるの？」
「…」
物田はマスクを外した。三人は息を呑んだ。その下には輝くようなイケメンがあったのだ。流し目が煌めいていた。
マスクを着けながら物田は言った。
「これ以上見たら、きみたちは感染する。くそっ…いや、なぜだ！なぜ僕はイケメンになってしまったのだ！」
そう言って物田は席を立った。小太りだった以前よりも明らかにスタイルが良くなっている。
「なぜだなぜだなぜだ！うわっ！」
突然彼は顔を押さえて苦しみ始めた。友人たちは思わず席を立って「どうした？」と駆け寄った。物田は顔を押さえながら、美しく苦悶し、身を捩ったため仮面が落ちた。物田は苦しみながら力を振り絞って呟いた。
「お前ら、逃げろ…俺の…俺のイケメンが…暴走し出した…」
「！！！？？」
「俺のイケメンが暴走してるんだ！逃げろ！うわっ！」
物田はさらに顔を押さえて苦悶した。が、指の隙間隙間から微かに光のようなのが漏れ出始めた。
「これは…！」
「強力なイケメン光線…！ぐわっ」
物田のイケメンから発せられたその光線が最上に直撃した。最上は

顔を押さえて苦しみだした。
「ぐわあああ、顔がああああ、イケメンになるうう！」
そして次に牧中に直撃し悲鳴を上げた。
「ぎゃあああああ！」
相田は顔を隠してそれを防いでいた。物田は漏れ出る光を遮りながら凄んだ。
「俺に構わず逃げろ！ｍｏｖｅ！ｍｏｖｅ！」
そして相田は、最上と牧中を連れて逃げた。彼らは外でも泣き叫んでいた。

「イケ、イケメンになっちゃう、うっ、うっ、うっ、イケメンになっちゃうよー！あーんあんあんあん」

その叫びは近所周辺に響いた。物田は覚悟を決めた。恐らくはもうじき誰かが家にイケメンを隠していると通報が来て、イケメン病研究集団のＮＤＤＯの奴らが、自分を捕まえに来るだろう。捕まったら隔離病棟、すなわちイケメンパラダイス行きだ。家から逃げなければ。だが今自分のこのイケメンは危険すぎる。隠さなければ。物田はホワイトマスクとつばの広い茶色の帽子を被った。

遠くからサイレンが聞こえてくる。

逃亡、そしてブサイク団

サイレンが鳴り響く。物田は庭から脱出した。現在ホワイトマスクにつばつき帽という異様な風貌の彼は、怪しまれないために下を向きながら歩いた。いつのまにかトレンチコートを羽織っていた彼は、知らず知らずのうちに手をポケットに入れていた。物田はますます自分の意志がかなりイケメンに侵略されていると知り焦燥感を抱いた。

人々は奇妙な歩き方をしていた。猫背でがに股歩き。彼らは不細工を意識しながら歩いていたのだ。物田は危機を感じた。下手したら歩き方でばれてしまうからだ。物田は彼らに紛れるために、猫背のがに股歩きをしようとした。

だが背中が曲がらない。股間接も外向きに曲がらない。

「そんな…ちがう、ちがう！」

物田は焦った。どうしても背筋が伸び、がに股どころかただの屈伸になってしまうのだ。物田は思わずイケメンボイスで悲鳴を上げてしまった。

「Ａｈｈｈｈｈｈｈｈ！！！！」

その時、その声を聞いて、物田の周りの通行人が立ち止まった。そして限りなく醜悪に仕立てあげたその顔を物田に向けた。その中の一人が言った。

「おまえ…イケメンだろ。」

物田はとっさに拒んだ。

「Ｎｏ、いや…いえ、違います。」

別の人が言った。

「いや、イケメンだ。その仮面の下には汚らわしいイケメンが潜ん

でいるのだろう？」
「違います！」
「白状しろ！その美声、お前はイケメンだろ！」
「違う、僕はイケメンなんか、じゃない！」
その時、サイレンが背後から響いて来た。物田は凍えた。こうなったら逃げねば。
物田は走り出した。なぜか手の甲と爪先をのばした美しいフォームで走っていた。人々は叫んだ。
「その走り方はイケメンだ！」
「なにくそ！待ちあがれ！」
「イケメン死ね！」
「私たちを殺す気なの？」

追われに追われたが、　やがて物田は暗がりに逃げたため、人々は見失い、見当違いの場所を探し始めた。物田は安心して、「はあ」と深い声でため息をついた。

だが、その時、殺気を感じて物田は振り返った。そこにいたのは…
「不細工団！」
そう、イケメンを憎み、イケメンを根絶やしにする事を目的とする凶悪暴力団。一目見てそうと分かるのは、彼らの独特な不細工の見せ方である。彼らは紫と緑とピンクのストライプと言う不気味なユニフォームを着、ストッキングを頭から被って上に引っ張ってニヤケていた。
物田が後退りすると彼らはせせら笑いながら近づいて来た。そうしてやがて袋小路にたどり着く。万事休す。
だが、物田はこうなったらこれまでと、最後の手段を用いた。つまりホワイトマスクを外して自らのイケメンを面にさらしたのだ。そのイケメンから発せられたイケメンフラッシュが不細工団に命中し

た時、彼らは「ああっ」と叫びながら一斉に倒れた。物田がマスクを着けて建物の上によじ登ってる最中も彼らは迫りくるイケメンの苦しみでもがいていた。

だが、誤算があった。その建物の屋上にＮＤＤＯの部隊がヘリ付きで待ち構えていたのだ。彼らはまるで伝染病を相手にするかのように、全身防護服を身に付けていた。その隊長が計器を持ちながら言った。

「はっはっはっ、逃げても無駄だよイケメン君。この機械がある限りはな。」

「なんだその機械は！？」

「落ち着いて落ち着いて、そんなイケメンな声出さないで。これはね、『イケメンハンター』とウチでは呼んでる便利な機械だ。」

「…？」

「いいか？イケメンというのはオーラがあって、イケメンフラッシュはオーラの収束だ。この機械はな、イケメンから漏れ出る微弱なイケメンオーラを感じとるのだよ。」

「…！」

「先程イケメン君は、その仮面を取っただろう？だから物凄いイケメン波動が来て、お陰で機械の半数が壊れた。まあ、弁償というわけじゃないが、君のような危険なイケメンは例の隔離病棟に移したほうがいいみたいだ。なにしろ君のイケメンは…」

「イケメンイケメン言うなあ！！！」

物田は叫びながら仮面を握って外そうとした。隊長にイケメンフラッシュを浴びかせようとしたのだ。

だがその時他のＮＤＤＯの部隊が彼をがっちり押さえた。そして彼らはテロリストの拉致みたいに、物田の頭に皮袋を被せ、麻酔注射を打った。麻酔が効くまでに彼はもがき暴れた。

「俺は絶対、イケメンパラダイスなんかに行かない。絶対に、ＤＥＮＩＡＬ！ＤＥＮＩＡＬ！」

やがて皮袋の中のイケメンフラッシュが徐々に弱まり、やがて真っ暗になって動きが無くなった時、隊長が冷たく言いはなった。

「気絶した。病棟に運べ。今はイケメンの効力は弱いが、決して皮袋は取るな。」

そして物田は車両へと運ばれた。

隔離病棟の生活

白いベッドの上に物田は横たわっていた。今は気絶しているために、彼の顔からはイケメンの輝きはない。夕陽の照らす窓の外から、カラスがかあかあと鳴いていた。

「はっ」

彼は目が覚めた。たちまち彼の顔はイケメンフラッシュでまあまあ輝きだした。彼はしばらく、ここはどこだろう…とあたりを見回し、やがてイケメンパラダイスにいたことを思い出した。自分は逃亡に失敗して収容されたのだ。彼は悔しくて、激しく泣こうとしたが、いくら泣いても、目から涙が伝うだけのイケメンの泣き方しかできなかった。

アナウンスが流れた。

「イケメンの皆さま、夕食の時間です。夕食の時間です。食堂にて配給しています。」

食堂に物田は行った。食堂内はどれを見てもイケメン、イケメン、イケメン。ただ進行度だけは異なり、光っているイケメンもいれば地味なイケメンがいた。細いのから太いのまであった。その人一人一人によって違うイケメンが与えられていた。

物田は配給マシンから食事をもらった。なぜかワインとキャビアみたいなグルメな食べ物ばかりであった。以前おかゆだったころに、イケメンにこんな貧相な食べ物では食べれないとイケメンらしいクレームがあったためである。

そして、物田が席に着いたとき、隣の、ちょい悪イケメンが離しかけてきた。イケメン進行度は物田とほぼ同じくらいだ。
「ＹＯＵ、新入りかい？」
「はい。」
「そうか・・・いつから？」
「・・・１ヶ月ほど前から。」
「そうか。どうしてかＹＯＵは分かるかい？」
「取引先が感染していました。」
「なるほど。実にＢＡＤだったね。」
その後イケメンらで会話がされたが、彼らは決して悪口や下品な話などは絶対できず、とにかく教養やロマンチズムやポエティといったイケメンにふさわしい会話しかできなかった。したがって今まで大して高尚な趣味を持ってなかった物田は話を合わせるのも一苦労だな、となんとなく思って口を開かなかった。
だがある細マッチョのイケメンが物田に話しかけてきた。
「きみは、どう思うかい？アルカイックスマイルの法悦について。」

アルカイックスマイルの意味もしらない物田はどう答えていいか分からなかったはずなのに、なぜか言葉がひとりでに出た。
「それはギリシャの悦びの中でも至上の宝だね。」
物田はますますぞっとした。自分のかつてブサイクだった「元の自分」は薄れて、どんどん「イケメンの自分」になりつつある。このまま自分は作り変えられてしまうのか・・・でもイケメンが頂点に達すると死ぬ点を考えると、イケメンにも限界があるのかもしれない。激しすぎるイケメンに耐えられなくて死ぬのかもしれない。

そんな退屈な毎日が続く。日が続くにつれ物田のイケメンはどんどん進行する。いまや何も考えずに、ロマンティックな詩を奏でられ

る。
「アルタカシスの向こう側に　黄金のサルカティアがある。
その芳香は　アルゴリンのごとく
風に乗って運ばれる」
もはや、彼はブサイクなころの自分を忘れていった。ブサイクというのがもはや理解できなくなった。今、彼はイケメンの言葉しか言う事ができない。イケメンのしぐさしかできない。なぜか解放感がする。なんだかふわふわする。自分から解放され、自分のイケメンに委ねればいいのだ。だんだん彼はイケメンになるにつれ“自分”として考える力を失っていったのである。

＊

自分の夫がイケメンになってしまったという事で、物田君子はどこの病棟に運ばれたかを一生懸命調べた。そして、口コミなりなんなりでとうとう突き止め、面会を要求した。だが感染の危険があると今までは拒否された。
だが、今日、とうとう許可された。スカイプを応用して、大画面のテレビ電話を使う事になった。テレビを通じてならイケメンフラッシュは受けない。君子はばっちりブサイクの化粧をして病棟に向かった。

ブサイク団の陰謀、そして妻のお見舞い

一方、ある広い下水道にて怪しげな集会が開かれていた。そう。ブサイク団である。
整形までして醜面となった彼らはまだストッキングを被っていなかったが、紫と緑とピンクのストライプの悪趣味なユニフォームは着ていた。その中のある男が、皆に呼びかけていた。皆は彼に答えて叫んでいた。

「我々のリーダー毒島がイケメンにされた！そう、あのにっくきイケメンのせいだ！」
「そうだ！そうだ！」
「ブサイクを生きがいとする我々にとって、ブサイクを誇りとする我々にとって、イケメンにするということほどの侮辱はない！」
「そうだ！」
「復讐だ！ブサイクの者どもよ、我ら醜悪神にかけて、歌を歌え！」

♪＝利用規約違反の為、削除させていただきました＝

とんでもない音痴と、並外れて悪趣味な歌詞の歌を歌いながら、ブサイク団はいっせいにストッキングを被った。最後に、「！！！！！」と大合唱で叫んだとたんにそのストッキングを上にぐいと引っ張った。顔が吊上がった。

＊

さて、面会室に君子は来た。巨大なディスプレイだけの部屋。君子が着くとディスプレイが点灯した。ディスプレイには等身大の物田がカメラ越しに映っていた。君子は息を呑んだ。物田のイケメンの輝きは今や眩しいほどになり、部屋や体が真っ白に照らされていた。その顔は物田の面影は微かにあったが、イケメン以外の何者でもなかった。

「あなた…」

「君子、君子、私の君子よ…久しぶりに会えるとは、オイレシアンの奇跡に勝る」

君子は唖然とした。口調がまるで違う。

「あなた…ずいぶん…進んだのね。」

「まあ、そうだ。僕のイケメンは最高潮に達しようとしている。最高潮に達した時…僕は美しく花のように散る。」

かつてはあれほど死を恐れていた物田なのに、今やイケメン過ぎて恐怖といった感情すら薄れつつある。君子は怯えて言った。

「…あなた、どうなっちゃったの？」

「この通りさ。僕はどんどん、体はもちろん、心まで、イケメンになってしまった。」

その時、君子は物田の表情が一瞬イケメンの微笑の裏に歪むのを見逃さなかった。彼は抑圧された声でいった。

「これは虚飾なのだ…僕は理想のイケメンというものに…体と…心の表層が支配されている…おそらく…イケメンが僕の深層意識を支

配したとたんに…体がイケメンに耐え切れなくなって…死ぬのだろう…」
そういって、顔をゆがめて苦しもうとしたが、イケメンの微笑で固まってゆがめられない。
君子はこうなったら打ち明けなくてはならないと思い、切り出した。

「あなた、実は、一つだけ助かる道があるの。」
「それは!?このイケメンを食い止めるのか?」
「いえ、食い止められないわ。あなたのイケメンは。大河内博士という博士が知り合いなんだけど、その人がすごい発明をしたの。」
「なんだ?」
「イケメンになっても体が耐えられるようになるカプセルよ。」
「!!?」
「あなたが言ったみたいに、イケメンが完全に浸透すると体が耐え切れずに死ぬ。だけど、大河内先生によれば、イケメンフラッシュを当て続けたミニ細胞を体に打てば体に免疫がついて、死なないらしいの。まだ学会では認められてないけど・・・」
「それはぜひ!!!」

その時ずがーんど爆弾が爆発する音が聞こえた。そして何かが腐ったような異常な臭気が臭ってきた。
職員は察知した。
「この臭気は!!!」
「ブサイク団!!!」
そして歌が聞こえてきた。
「♪＝利用規約違反の為、削除させていただきました＝」

そして、起こった・・・・ブサイクとイケメンの戦い

外で次々と臭気爆弾が投げられる中、君子は病棟職員から防護マスクのようなものを被せられる。
「これから無数のイケメンを見るだろうから、そのために。」
ずがーん！付近で大爆発が起きる。壁ががらがらと崩れ、君子は始めて生でイケメン物田を見た。
「あなた！」
「君子！」
そして二人で走りながら会話した。
「これから大河内博士に会いに行きましょう。」
「どこにいるのだ？」
「13号棟の3階よ。」
「何？近くにいるのか？それはありがたい。」
一方は普通に、もう一方はやたら姿勢良く彼らは13号棟へと向かった…だが…
「がああああ！」
不細工団戦士の一人、出歯の徹が現れた。彼の歯はサーベルのように長く、あごの裏まで達していた。被っているストッキングには偏光加工しているため、イケメンフラッシュは受けない。徹と物田で戦いが起きた。物田はやたらスタイリッシュな攻撃ばかりかますが、徹は噛みついたりと醜い攻撃を返した。
だが、物田は組伏せられた。徹は醜い狂気の笑いを浮かべ、謎の液体の入った瓶を取り出しながらキンキン声で言った。
「これは硫酸だ！これでお前のイケメンを汚してやる！」
そして物田の顔に注いだ。
ところが、硫酸が当たった途端にイケメンフラッシュで蒸発し、蒸気となって空中に漂った。それは徹の右腕を直撃し、彼は「やあああああ！！！」と叫びながらのたうち回った。その隙に二人は逃げ

た。
「13号棟は…」
「この左よ！」
「あ、ここだ！入ろう！」
「わあっ。よし、階段を昇る！どけ、どいてくれ！どけ！」
「あ、博士…」
「そんな…」

大河内博士の前にはストッキングを着けた不細工団が固まっていた。すでに情報が漏れ、捉えられたのだ。
「はっはっはっ、博士に会いに来たのか？」

向こうから不細工団戦士、ゴールドマンが現れた。名の由来は、彼は黄金比の顔の比率の持ち主だからである。こう聞くとかなりイケメンだと思うかもしれないが、ここでいう黄金比は、ファッションでいう黄金比ではなくて数学でいう黄金比である。つまり異常な面長だったのだ。
ゴールドマンは言った。
「それはさせない。イケメンは助けるべきでないからだ。」
「会わせろ！」
「いいだろう…だが、私の用心棒が許さないよ。」
ゴールドマンの後ろから、４ｍほどの髭もじゃの巨人が現れて、牙を剥いて唸っていた。それは最強の不細工団戦士、ギガンテスだ。
「…こいつは実はイケメン病に感染している。だが、ほぼ姿が変わらない。我々の中で、最強の不細工だ。ギガンテス、やれ！」

ギガンテスはがあっと叫びながら猛烈な速さで走ってきた。だが物田は立ち続けていた。そしてギガンテスが間近に迫った時、物田の顔は突然激しく輝きだした。イケメンフラッシュだ。ゴールドマン達不細工団たちは逃げ出したが、ギガンテスが「ぐがおおおお」と

叫んで顔を覆ったが、物田はニヤリと笑いながらさらにイケメンの輝きを増した。

その光景を防護マスク越しで見つめていた君子はふと、異変を感じた。ピキピキと音が鳴る。次の瞬間、防護マスクの窓が割れてしまった。あまりのイケメンで割れてしまった。イケメンフラッシュは容赦なく君子を照らし出した。君子は異変と苦痛を感じながら悲鳴を上げようとしたが、なぜか声が出なかった。今や無言で訴えるしかなかった。

（お願い…気づいて…お願い…）

もはやギガンテスは顔を押さえても無駄で、顔体がぐきぐきとイケメンに変形していった。苦しむ顔も勇ましい。最初は「ぐがおおがごおお」と獣の咆哮だが、やがて「Ｎａｈｈｈｈｈ！Ａｈｈｈｈｈｈ！」と雄叫びを上げ始める様はまるで狼男が人間に戻る様である。ギガンテスはそのまま究極のイケメン巨人になって、美しいフォームで仰向けに倒れ、力尽きた。

その時、物田の背後から、「く、く、くるしいよ…」と呻く声が聞こえてきた。それが妙にアニメ声である事に不信感を抱いた物田はささっと美しく振り返った。

「ああ！」

そこには変わり果てた妻の姿があった。なぜかイケメン病は女性に対しては「アイドル病」であった。したがって妻の姿は、それ相応に顔と体が変化していた。

「そんな！」

「・・・早く、行くのよ・・じゃないと、あたし・・・可愛くなりすぎちゃう・・」

そこで、物田は妻の君子を立たせて、大河内博士の部屋に向かった。妻はモデルウォークみたいな不自然な歩き方をしていた。

最終決戦！そして人類の運命は！

扉を明けると、不細工団長腹中海老男（はらなか・えびお）が整形済みの醜悪な顔で大河原博士に銃を向けながら防護ゴーグルごしにらんでいた。これまでの怪物たちに比べれば彼は大したことがない。博士は頭に黒い袋を被せられていた。物田達は言った。

「どきなさい。もう貴方は、一人です。」

「そうよ、そうよ。」

すると腹中はゆっくりと物田達をにらんで言った。

「多分こんな事があるだろうと予期して、俺は、ここの配置を自ら希望した。ははっ見たまえ！」

腹中は上半身のTシャツをびりっと破いた。その腹には海老の腹の小さな足がならんで沢山生えていた。

「きゃあ！」

とやたらアニメ声で君子は気を失いかけ、それを支えながら物田は言った。

「…こ…これは…」

「改造したのだ。俺は愚かなギガンテスよりも強いって事さ！」

そして腹中はぐきぐきと変身し出した。体は青白くなり、手は伸びて鋏になり、腹の小さな足が長く伸び、やがて３ｍの巨大海老になった。といっても、殻があるわけでもなく、全身を覆うのは皮膚なので、さながら殻を剥いた海老のような姿で、海老嫌いが見たら失神するような壮観であった。

巨大海老はキシャーと吠えた。もはや不細工とかそう言う次元じゃない姿を見て君子は

「どうするの？」

と物田にすがったが、彼は言った。

「二人で戦うしかない。」

そして海老は突進して来たので、二人は避けた。避けながら君子は
「どうやって戦うの？」
と尋ねると、物田は
「君が戦えなくても君の中のイケメンは戦ってくれるさ。」
と答えた。
その時海老の両鋏が彼らに襲撃してきた。二人ともそれを巧みに避け、鋏にアタックし、君子は海老の頬に飛び蹴りしながら歓喜の声を上げた。
「分かったわ！私の中のイケメンに身を任せればいいのね！」
そして戦いは続く。二人とも善戦だったため、引き際と考えたのか海老は急激に後退りした。どうしたのだろうと思った次のとたん、海老の口から無数のフナムシが溢れ出た。なんと不細工な攻撃。黒い大群はぞぞぞ、ぞぞぞと二人に向かって走ってきた。
「すごい大群だわ…」
「こうなったらあれしかない。」
「そうね。」
「イケメンフラッシュ！」
二人の顔が輝いたため、フナムシは次々とイケメンになって（？）地面に転がった。やがて全てのフナムシがイケメンになったので海老は「キシャー！」と叫び、二人の方に再び突進した。
「防護ゴーグルを外せ！」「えっ？」
迷う前に君子は勝手に動いていた。高跳びをし、海老の頭にたどり着くとゴーグルを掴んで引き剥がした。
たちまち海老の顔面は、二人のイケメン光線を浴びた。海老はうめき叫びながらぐきぐきと体が変形したが、なにしろ、海老の姿のままイケメンになろうと言う事に無理が生じ、かっこよくなるどころか、もっと奇っ怪な姿になった。海老は「やめろ…やめろお」とうめきながら外に逃げ出した。
そして二人は大河原博士に近づいて、頭に被せられた黒い袋を取った。その下には輝くイケメンが死にかけていた。

「大河原博士ぇ！」
「不細工団のしわざじゃ…わしはイケメンにされた…薬…わしのポケットにある。早く打て…。上手く行ったら、わしの友人大草原（オオクサハラ）に…上手くいったと…報…告……く…くあああ」
博士の顔が輝きだし、苦しみ始めた。博士がみるみるイケメンになるのを二人はしかと目撃した。そして完璧なイケメンとなった時、輝きはふっと消え、そのまま博士は美しい死顔をがくりと下げた。
「…」
「…」
「…とりあえず薬打ちましょう。」
「…そうだな。」
そして二人はしばらく黙っていた。長い間黙っていた。思い出を語ろうとしたが、記憶が塗り替えられてる気がして、できなかった。何やってもカッコいい事しかやらなかった気がするからだ。

そして…突然。
「う…くあっ！」
「あなた！」
物田は顔を押さえて苦しみ出した。久々にイケメンの暴走が来たのだ。とうとう来たか…薬の効果を試す機会だなと思いながら苦しんだ。やがて苦痛が強まり、それが頂点に達した時、物田は目の前が真っ白になった。自分はやはり死んだかと思った。だが、だんだん周りの世界が見えてくるにつれ、物田の意識はがらりと変わった。以前の物田はたしかに死に、あらたに完全なイケメンとしての物田が蘇った。
「あなた、大丈夫？」
妻の問いに物田はイイ声と快活な笑顔で言う。
「大丈夫さ。」

かくして、薬の効果が広まって以来、急激にイケメン病の感染が広まった。いままでブサイクばかりだったＴＶが極端にイケメンだらけになった。そしてとうとう、老若男女問わず、日本中、いや、世界中の人間がイケメンになった。見た目だけでなく、仕種や考え方や行動まで。

世界はこのまま、右肩上がりに上手く行き続けるしかなかった。

（完）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1454m/

イケメン病

2010年10月14日17時30分発行